

## 「猶子」と「養子」

山里 純一

(名桜大学大学院特任教授)

『四本堂家礼』は、久米村の蔡家支流（具志家）の11世蔡文溥が、1736年（乾隆元年）に、中国の『朱子家礼』を参考にしながら、子々孫々まで守るべき家の規範をまとめたものであるが、その中に『朱子家礼』にはない「猶子之事」が立項されている。

そもそも「猶子」という語は、儒家の經典の一つ『礼記』檀弓篇上に「喪服、兄弟之子、猶子也」とあり、服喪の文脈でいえば「なお子のごとし（我が子と同じ）」の意味である。しかし擬制的親子関係の子の用語として、中国の家族法関連の研究（たとえば滋賀秀三『中国家族法の原理』など）には全く出てこない。日本においては、平安時代前期に空海が著した仏教書『三教指帰』にタームとしての「猶子」が初見し、中世・近世においても「猶子」の語は使われているが、混用例を除くと、おおよそ家督、財産を継承させることを目的としたのが「養子」で、とくにそうした目的を伴わないのが「猶子」であると区別されているようである（『日本歴史事典』）。

そこで『四本堂家礼』の「猶子之事」を見ると、中国清代に作られた『齊家宝要』を引用しながらも、原文にはない「猶子」の語を用いて説明している。なぜ蔡文溥は「養子」ではなく「猶子」としたのか。また「猶子之事」には「猶子」とは別に「養子」の語が二箇所に見えるが、「猶子」との違いは何なのか、ということ疑問に思った。

本項によれば、家督を継いでいる者に子が無く、跡目を立てる時は、まずは兄弟の生んだ男子、もしなければ弟を立てるべきであるという。また子が無い場合は、あらかじめ宗族内に「猶子」となるべき人を見つけて申請し認めら

れたら、吉日を選んで一門に披露すること、そして「猶子」は養父母が活着している時も死んだ後も実の親同様の恩として孝養を尽くように記している。逆に他家の「養子」として出る人にもそのことを言い含めている。さらに正妻に子どもがいない場合は正妻以外の女が生んだ長男を跡目に立てるが、宗族にいなければ外孫、外孫にいなければ異姓から立ててもやむをえないとする。その場合、異姓から取る場合には「養子」の語を用いている。一方「猶子」については、正妻に子が無く「猶子」を取るが、その後正妻に男子が生まれたり、嫡孫の存在がわかった時は、「猶子」を解消し実の親元へ差し戻すのが原則となっていた。

この用例から言えば、「猶子」は「嗣子」予定者としての暫定的な存在で、正式に「嗣子」となった段階で家・屋敷などの家督を継がせるというものではなかったか。これに対して「養子」は最初から家督承継者であることが保証されており、「猶子」よりも揺るぎない跡目であったように解される。

『四本堂家礼』以外にも『球陽』『琉球国由来記』『僉議』『家譜』『辞令書』等には「猶子」「養子」「婿猶子」が見え、組踊「未生之縁」にも「婿猶子」は出てくる。評定所「僉議」には、同一箇所「猶子」と「養子」の語が両方書かれていたり（康熙55年「了伯」など）、家譜には同姓の二世と三世の箇所に「婿猶子」と「婿養子」が書き分けられているものがある（『毛姓家譜』支流）。「猶子」と「養子」はいずれも擬制的な親子関係にある子であるが、今後「婿猶子」も含めてその実体について検討する必要があるだろう。

## 縁由-3年前のことなど

佐々木 徹

(ゆまに書房『琉球文学大系』担当マネージャー)

何年か越しでご無沙汰をしていた小林基裕さんから、突然電話をいただいたのは 2021 年 5 月初めの頃、まるで 5 月のようにではない、ぐずついた天気肌寒い日の午後だったと思います。「コロナ禍」による第 3 回目の緊急事態宣言の重苦しい雰囲気の中、その日私は在宅勤務をしていました。「沖縄関係の出版について相談したいことがあるから会いたいけど、良かったら、そっちまで行っても良いし、どう？ 詳しくは会った時に話すから。」いつものように唐突な感じで話が始まる小林さん。でも、その時はなにか様子が違いました。わざわざ家まで？ 天候のせいかな声で鳴く飼い猫を眺めながら、これはただごとではないなと思いました。

再会の挨拶もそこそこに、家の近所の喫茶店に入り、注文したコーヒーも待たず、大きな紙袋から出てきたのが、「『琉球文学大系』刊行年次計画書」でした。名桜大学創立 25 周年記念・公立大学法人化 10 周年記念事業、全 35 巻、年度 4 巻、3 ヶ月毎に 1 冊の配本、2022 年 3 月刊行開始……。早口で話す小林さんの説明を聞きながら、その壮大な構想と遂行困難なようなタイトスケジュールに、ただ驚愕し圧倒されていました。さらに『おもろさうし 上』のゲラもあり、編集作業はすでに始まっています。これを、ゆまに書房で引き受けないかと小林さんは言います。しかし、「安易な気持ちで引き受けてもらっては困る」と。社で検討しますと答えたものの、困惑する編集長の顔が頭に浮かびます。コーヒーを飲み終わると、無料で日本茶が出てくる変わった喫茶店で、そのお茶を飲み飲み、この日は 3 時間近くお話をしました。

それからまもなく 3 年がたとうとしています。編集刊行委員長波照間永吉先生の真に超人的な学

識と牽引力、小林基裕編集コーディネーターの常に先を見越したリスクマネジメント的な編集センス、渡具知伸編集刊行事務局長の広範に及ぶ人脈と行動力、そして組版・印刷・製本関係の方々の細やかな対応などに支えられ、また、毎回下版間近になると沖縄で行われる、「編集合宿」などを経て、2024 年 3 月 31 日現在、「大系」は予定通り 8 巻分が上梓されています。

この事業については、社内で検討熟慮の末、一度引き受けをお断りしたことがありました。ゆまに書房では、ごく限られたことしかできなかったからです。しかし、2021 年 9 月 15 日、状況は 180 度転回します。この日、波照間先生を初め、編集刊行委員会の方々が来社され、ゆまに書房の創業者でもある荒井秀夫会長（当時、2023 年 7 月 28 日勇退）と面談、これが決定打となりました。「これは、出版史に残る事業だ。これも何かの縁だろう、大変だが引き受けようと思う。」面談後、荒井は決断。その後、出版に関する諸条件の合意に至り、10 月 7 日、ゆまに書房にて「覚書」手交式（沖縄からお持ちいただいた、泡盛 10 年コースで祝杯）、11 月 26 日、名桜大学にて正式調印及び記者会見と順調にことは運び、翌 2022 年 3 月 30 日、ついに記念すべき第 1 回配本『1 おもろさうし 上』の刊行を迎えます。

弊社事務所に、目的を果たし無事那覇へ帰帆した進貢船を迎える華やいだ情景を描いた「進貢船図」（複製／沖縄県立美術館・博物館蔵）が飾ってあります。順風相送、『琉球文学大系』という船が、まさにこの進貢船のように無事帰帆（完結）すべく、一筋の縁由に導かれて乗船した一乗員として、微力ながらも皆様と共に力を尽くして参りたいと存じます。

## 2023年度 下半期業務報告

(10月～3月)

### 『琉球民俗関係資料4』編集作業 (10月～11月)

当初6月刊行予定としていた民俗篇刊行日程については『球陽 上』と刊行順を変更して作業が進められました。第1次編集合宿の池田公民館(10/28～11/5)を経て、出張校正(11/6～11/13)は沖縄高速印刷で行い校注者・事務局がゲラに向き合い、難産ではありましたが11月刊行を無事果たすことができました。

### 『琉歌 中』編集作業 (12月)

刊行順の一部変更により間を置かず『琉歌 中』の編集合宿が行われました。第1次合宿を池田公民館(12/11～12/16)、途中作業場所を琉大サテライト事務局(12/16～12/20)に移し、出張校正は沖縄高速印刷(12/21～12/26)にて2023年12月の仕事終わりの年内校了にたどり着きました。

### 2024年度担当巻校注者編集会議開催！

本年度は4年にわたり実施していた全体会議を改め、標記のとおり2024年度4冊担当巻校注者にしぼり、実務的な編集会議が琉大「50周年記念館」(2024年2月23日開催)で行われました。参加者は校注者12名、事務局を含め総勢19名で全体説明が行われ、各巻別会議(『琉球和文学 上』、『球陽 下』、『琉球説話3』)も併せて行われました。なお、『混効験集』については別途3月16日(東京出張時)に巻別会議が行われました。



2024年度担当巻校注者編集会議の様子(2/23)、琉大50周年記念館

### 波照間永吉委員長「第51回伊波普猷賞受賞」！

「琉球文学大系」編集刊行事業(全35巻/12年)を総理する波照間委員長の半世紀にわたるオモロ研究が評価され、この度『琉球文学大系 1・2 おもろさうし 上・下』著者である波照間永吉氏に栄えある伊波普猷賞の授賞式・祝賀会(2/7)が行われました。会場のパシフィックホテル(那覇市)はコロナ禍明け通常開催4年振りということもあり、

多くの知人・友人、関係者が集う盛会となりました。この度の伊波普猷賞受賞は「琉球文学大系」編集刊行事業推進にますます弾みがつく好機となることが期待されています。



会場には波照間先生(右)に多くの祝福が寄せられた(2/7)

### 『組踊 下』編集作業 (2024年2月)

大系事業初となる年度4冊目標記編集合宿が池田公民館(2/5～2/20)、沖縄高速印刷(2/21～2/27)の日程で行われました。2/27校了の後、藤原印刷(長野県)、ゆまに書房(東京都)の白焼作業による確認を経て、年度内(3/28)に本学への納品が完了しました。下半期で3冊を編集刊行する過密な日程となりましたが、各篇校注者を含め関係各位(池田公民館、沖縄高速印刷、藤原印刷、ゆまに書房)による産学間連携協働で成し遂げられました。

### テキスト刊行に係る先島、県外出張 (1月、3月)

『組踊 下』に収録する先島の組踊りに関連する底本調査に波照間委員長、渡具知編集局長が出向き1泊2日(1/28～1/29)の調査が行われました。石垣島伊舍堂家では「月之豊多」「未生之縁」、与那国島田島家では「勝連の組」の底本調査等が関係者を集めて行われました。その他、3月には東京出張(3/15～3/17)で法政大学沖縄文化研究所等での底本調査、石垣出張(3/25)では富永家、八重山博物館での調査(撮影等)も行われました。



与那国島田島家で関係者を集めた調査の様子(3/25)

## 一期一会

石橋 佐紀子（大系サテライト事務局）

私が芸大の大学院に進学するために沖縄に来たのは2019年のこと。入学後初めての授業は、波照間永吉先生の琉球文学の授業だった。その日はたまたま受講生が私しか来ておらず、先生と二人で互いに自己紹介をした。その際、先生に「新聞を見たか」と聞かれた。見ていないと答えると、先生が「僕は今こういう仕事をやっているんだ」と、新聞記事の切抜きを見せてくださった。それは数日前の記事で、名桜大学で「琉球文学大系」全35巻を刊行する事業が始動すると書かれていた。当時は琉球文学の「り」の字も分からなかった私だが、学部生時代に毎日のように手に取った岩波の大系や小学館の全集のような本をこれから10年かけて作るという話にただただ感激したことを今でも鮮明に覚えている。

さて、その時は他人事として聞いていた大系事業が、にわかに身近なものになったのは2022年の夏のことだ。指導教員の鈴木耕太先生から「大系『組踊 上』の校正を手伝ってほしい」と言われ、雨が降る中バイクに乗っておもろまのコンドミニアムを訪ねて行った。約一月の間、校注者の先生方に囲まれて朝から晩まで組踊のテキストを素読みした。分からないことがあれば先生方に質問し、テキストを読み進めるのは（苦勞なさっていた先生方には失礼かもしれないが）とても楽しかった。

それからまた1年が過ぎ、今度は『琉歌 中』『組踊 下』の口述筆記のお手伝いをするようになった。口述筆記のほかに、『組踊 下』では附録の「組踊上演地域地図」の作成もさせていただくようになった。合宿時期はそれぞれ12月と2月。マフラーと手袋をつけて合宿所までバイクで走る日々は、大変ながらもそれを上回る学びが得られ、やはり楽しい日々だった。

そして、今年の4月からは事務局員として働くことになった。つくづく人生何が起こるかわからないなどと思う。5年前、ただただ感激して波照間先生から大系事業の話聞いていた私が今の私を見たらどう思うだろう。これから大変なこともたくさんあるだろうが、あの日の感動を忘れず、精いっぱい働いていきたい。

### 「琉球文学大系」新規関係委員の紹介及び事務局の人事異動

本事業の関係委員に、このほど知名定寛氏（神戸女子大学文学部史学科教授）が新たに加わりました。知名氏は第32巻『琉球民俗関係資料1』に収録される「琉球国由来記」仏教関連分野を担当します。

この度「琉球文学大系」編集刊行事務局で編集等に尽力した宮城一春さん（琉球大学サテライト事務局）、比嘉緋南さん（大学編集事務局）が3月をもって退職となりました。また、人事異動により琉大サテライト事務局から前里貴史さんが名桜大学地域連携研究推進課（研究所）への配属となりました。

### 「琉球文学大系」関連記事目録—2023年10月～2024年3月

- ・沖縄タイムス編集部「第51回伊波普猷賞 波照間永吉『おもろさうし 上・下』」（沖縄タイムス、2023年12月31日、日刊／1面）
- ・知念豊（沖縄タイムス学芸部）「第51回伊波普猷賞 波照間永吉氏に聞く」（沖縄タイムス、2024年1月24日、日刊／文化 p12）
- ・狩俣繁久（琉球大学名誉教授）「〈講評〉研究を凝縮し大きく進展」（沖縄タイムス、2024年1月24日、日刊／文化 p12）
- ・知念清張（沖縄タイムス学芸部）「沖縄タイムス学術・出版三賞 5氏・2団体・3出版社に贈呈」（沖縄タイムス、2024年2月8日、日刊／1面）
- ・知念豊（沖縄タイムス学芸部）「「栄えある賞」祝福に笑顔」（沖縄タイムス、2024年2月8日、日刊／社会 p23）
- ・八重山毎日新聞編集部「波照間氏の伊波普猷賞祝う」（八重山毎日新聞、2024年3月26日）
- ・平良考陽（沖縄タイムス八重山支局）「伊波普猷賞受賞波照間さん祝福」（沖縄タイムス、2024年3月31日、日刊／地域 p16）

### 事務局だより

本事業に対しこれまで継続して応援くださっている伊差川則子氏より、下半期（『琉球民俗関係資料4』『琉歌 中』『組踊 下』）編集合宿への茶菓子やコーヒーなど多くのお心尽しの品が各編集合宿先（西原町池田公民館、沖縄高速印刷）に届けられました。記して、心より厚くお礼申し上げます。